

リカードオ国際経済理論における 工業国と農業国との貿易

Trade between Industrial Countries and Agricultural Countries in David Ricardo's International Economic Theory

中山 忠行

NAKAYAMA Tadayuki

1. はしがき

工業国と農業国との貿易について、リカードオはどのように考えていたのであろうか。リカードオはこの問題を著書である『経済学及び課税の原理』“Principles of Political Economy and Taxation, 1817”で取り扱ってはいない。とはいうものの、当然の帰結として、この問題を考える必要があるのではないと思われる。イギリスにおける自由貿易運動を推進していった中心的な理論はリカードオの理論であった。「完全な自由貿易制度のもとでは、各国は当然その資本と労働を自国にとってもっとも有利となるような用途に向ける。この個別的利益の追求は、全体の普遍的利益とみごとに結びついている。勤勉を刺激し、工夫力に報い、また自然によって賦与された特殊の諸能力をもっとも有効に使用することによって、それは労働をもっとも有効にかつもっとも経済的に配分する。一方、諸生産物の全般的数量を増加させることによって、それは全般の利益を普及させ、そして利益と交通という一つの共通の紐帯によって、文明世界をつうじて諸国民の普遍的社会を結成する。⁽¹⁾」当時イギリスは“The workshop of world”として不動の地歩を築いていた事実思いを馳せる時に、この問題について究明することが、何故にイギリスで自由貿易が実践に移されていったかという事情を解明する糸口を与えてくれることになるであろう。

リカードオは資本主義社会をば唯一で絶対的な社会であるとしたのである。この資本主義社会の存続が大前提となって理論が構築されている。したがって、リカードオにおいてはずべての判断は資本主義社会から出発して、そしてまた、資本主義社会に辿りつ

なかやま ただゆき (経営情報学科)

くことになる。これは資本主義社会を変化しない存在物として扱う見方ではなくて、資本主義社会が成長し発展し、そして衰えていくものであることを明確に意識しているのであった。どんなに発展しつつある社会といえども、事物自然の成行にまかせておく限りは、何れの日にか進歩に遅れをもたらして、発展が止まることによって萎縮的で沈滞的な社会へと向う。この必然的な過程を描くことこそが、リカードオの経済理論が意図しているものであった。このような見方は社会の自然的発達過程であり、この意味するところは事物が自然の成行にまかせられる以上はそのような過程の経由は不可避的であるということの意味している。それゆえに、資本主義社会が老衰化していくのを阻止しあるいは甦生させるための策を否定せんとするものではない。「古典経済学は基本的に成長経済学の方角を見究めていた。そしてそれらの主要な関心はいかにして「諸国民の富」が増加したかを説明することであった。増加した産出高を説明するのに、特化と分業は特別な注意を与えられた。労働が手工業的方法に対立するものとして職分を列挙することによって特化されたときにいかに多くのピンが生産することができるかというアダム・スミスの描写は広く引用されそして法則化された。特化と分業の程度は市場の大きさいかんによる。すなわち大きな市場はかなりの程度の特化と分業を促進するだろう。⁽²⁾」

工業国と農業国との貿易は所謂資本主義先進国と発展途上国との貿易を意味しているが、このような貿易を促進させていくことが資本主義先進国にはどのような意味をもっているのかを究明していく問題となる。

註

- (1) David Ricardo; *The Principles of Political Economy and Taxation*. P.81 Everyman's Library. Dent: London Dutton: New York デイヴィッド・リカード全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻経済学および課税の原理 堀経夫著 156頁。雄松堂書店
- (2) Richard I. Leighton; *Economics of International Trade*. P.2 McGraw-Hill Book Company, New York, St.Louis, San Francisco, Düsseldorf, London, Mexico, Panama, Sydney, Toronto. KōGAKUSHA COMPANY, LTD. Tokyo

2. リカードオ・モデルの苦心と工業国と農業国との貿易について

「彼は多くの原理が一商品を生産するための費用を取り扱うということを知っていたにもかかわらず、リカードオは彼の国際貿易理論を労働費用もしくは、より正確に、労働時間にもあきあきしてしまった。明らかに、労働価値費用の漸進的な放棄で国際貿易理論は手術を経験しなければならなかった。しかしリカードオの接近は直接には退けなかった。それよりも、彼の後継者によって広げられそして修正されたのである。⁽¹⁾」リカードオは貿易の利益をば享楽品の数量の増加と消費者が享楽する効用の増加にあると

する。これは有名な貿易論を展開するリカードオの主著『経済学及び課税の原理』の第7章『外国貿易について』“On Foreign Trade”の次の冒頭の文から明らかである。「外国貿易の拡張は、商品の数量したがって享楽品の総量を増大させるにはきわめて有力に貢献するべきであろうが、しかしけっしてただちに一国の価値額を増大させるものではない。すべての外国財貨の価値は、それらとひきかえに与えられる、わが国の土地と労働の生産物の分量によって測定されるから、われわれは、仮に、新市場の発見によって、わが国の財貨の一定量とひきかえに外国財貨の二倍量を取得するとしても、より大なる価値を得ないであろう。もしもある商人が、1000ポンドの額のイギリス財貨を購入することによって、イギリス市場で1200ポンドで売ることができるある分量の外国財貨を取得しうるものとすれば、彼は、彼の資本のこのような使用方法によって20パーセントの利潤を取得するであろう。しかし彼の利得も、輸入商品の価値も、共に、取得された外国財貨の分量の多少によって増減することはないであろう。たとえば、彼がブドウ酒25樽も輸入しようと50樽を輸入しようと、ある時には25樽が、また他の時には50樽が等しく1200ポンドで売れるかぎり、それは彼の利益にはすこしも影響しえないのである。いずれの場合にも、彼の利潤は200ポンド、すなわち彼の資本にたいする20パーセントに、限定されるであろう。そしていずれの場合にも、同一の価値がイギリスに輸入されるであろう。⁽³⁾」そして第22章の末尾でも述べる。「私は、外国貿易であれ国内商業であれ、すべての取引は、生産物の価値を増加させることによってではなく、その分量を増加させることによって、有利なものである、ということを実証しようと試みてきた。われわれがもっとも有利な国内商業および外国貿易を営もうが、それとも禁止法によって束縛される結果として、もっとも不利な取引で満足することを余儀なくされようが、どちらの場合により大なる価値を取得するということはないであろう。利潤率および生産される価値は同一であろう。その利益は、つねに、セ工氏が国内商業に限定しているように思われるものに帰着する、すなわち、両方の場合、生産された効用という価値以外には、なんらの利得もない。⁽⁴⁾」外国品の価値はこれに対して与えられる本国財貨の価値で表される。ゆえに、貿易で問題となるのは価値量に非ずして、本国財貨の一定量を交換することによって手に入れる外国財貨の数量が大きいか小さいかという使用価値の問題である。したがって、リカードオはあらゆる商業の目的は生産物を増加することであると述べる。「諸国民の富」に対して外国貿易の貢献についての質問がおこった。それは外国貿易が市場を拡張しそして特化と分業からかなりの利益を与えたということがはっきりとあらわれた。しかしながら、それはまだ議論をはっきりと説明することが必要であった。すなわち商品がいかほど輸入されそして輸出されるだろうかを示すためと外国貿易からの利益を示すために。展開された理論は比較的優越の法則と呼ばれる。⁽⁵⁾」リカードオは数例で比較生産費説について論じた。すなわち、イギリスとポルトガルの両国を例にとって、ロシアとブドウ酒とを生産することができるとし、かつ、イギリスでは、ロシアを製造せんがためには1年に100人の労働を必要とし、またブド

ウ酒を醸造せんとするには120人の労働を必要とする。ポルトガルにおいては、ロシアには90人の労働を、またブドウ酒には80人の労働を必要とする場合においては、イギリスはロシアを製造し、ポルトガルはブドウ酒を醸造することで、相互にその生産物の交換をすることになるとするのである。「このようにして、イギリスは80人の労働の生産物にたいして、100人の労働の生産物を与えるであろう。このような交換は同一国の個人間では起こりえないであろう。100人のイギリス人の労働が、80人のイギリス人のそれにたいして与えることはありえない、しかし100人のイギリス人の労働の生産物は、80人のポルトガル人、60人のロシア人、または120人の東インド人の労働の生産物にたいして与えられるであろう。⁽⁶⁾」この命題において、価値量を問題としていて、国際間においては不等価交換が行われていると論ずる者もある。

リカードオの真意はどこにあるのであろうか。これは、与えられた条件の下では、二財貨とも同一国で生産されるものではないということの意味している。仮にこれが一国内における両地方の生産条件であるとすれば、換言すれば、同じ国のA地方がB地方と比較した場合にロシアの生産、ブドウ酒の醸造において絶対的優越をもっているとするならば、ロシアもブドウ酒もA地方で生産醸造されることになる。ゆえに、A地方のブドウ酒とB地方のロシアの交換は実現されないことになってしまう。しかし乍ら、国際間においては事のありさまはこれと異っている。両国はそれぞれの比較的優越をもった財貨に生産を特産して、相互にその生産物を交換する。何故ならば、国内では資本および労働の移動は自由であるが、国際間においては労働の移動は大きい障害が待ちうけているのである。ゆえに、「一国における諸商品の相対価値を左右するのと同じ規則が、二つあるいはそれ以上の国々のあいだで交換される諸商品の相対価値を左右するわけではない。⁽⁷⁾」リカードオは貿易理論の中心課題を、自国の一定の労働時間の生産物に対して与えられる外国財貨の数量の観点においている。したがって、そこにおいては商品を一国の価値体系から他国の価値体系に移行して追求するのを思いとどまっているのである。リカードオによって等閑視された問題について後世の学者が取りあげることになる。それは国際間には生産力段階に差が存在することから不等価交換が行われる。したがって、国際間における生産力段階の差が生産物交換を通じて、先進資本主義国が発展途上国を搾取することを可能にするという理論に展開されていくことになる。

この先進資本主義国対発展途上国の問題については、工業国対農業国の問題を等閑にできないことになる。リカードオは貿易の問題について専らこれを生産物の数量の問題および使用価値の問題として展開しているのであって、国際価値論上の問題として展開するのを見合わせているのである。「もしもリカードオが彼の生産論が経済学および課税の原理のどの点で求められるべきであるかをたずねられたならば、彼は完全に公平な取扱いで答えただろう。そしてそのタイトルの一般原則にもかかわらず、彼の著作は富の生産を論じるために役に立たなかった。それは単に「経済学における主要な問題」の解決を試みるための企てであった。そしてそれは地代、利潤および賃金の間の一国の生

産物の分配を規制する諸法則を決定するべきであるとリカードオは考えた。彼はたしかに収穫逓減法則について、19世紀の経済学につけ加えねばならなかった。しかしリカードオとマルサスとウエストはつねに生産の結果でよりも分配法則の結果により関心をもっていたように思われる。⁽⁸⁾そしてリカードオは「おおよそ一国が貿易によって利益するのに二つの方法がある⁽⁹⁾」と述べる。それは一般利潤率の増加と商品の豊富である。一般利潤率の増加は海外から低廉な食料を獲得する結果としてのみ起るとリカードオは述べる。リカードオは、資本の利潤と労働の賃金とは相補性をもっているが故に、賃金を決定するのは食料の価格である。したがって、利潤は食料の価格に依存すると判断するのである。工業国対農業国の貿易に関する明白な考えはここに読み取れるであろう。リカードオは資本主義社会を唯一絶対の社会であるとする。それは資本主義社会が資本に依存している社会であり、資本は利潤率を目当てとして投下される。利潤率が大なるときには資本蓄積の速度も大となる。ゆえに、資本主義は進歩し発展していく状態になるとリカードオは観るのである。工業国はその製品を輸出することによって農業国から食料や原料品を輸入する場合、ともかく、工業国の利潤率は一般的に上昇する。したがって、工業国では資本の所有者にとって利益となる。食料の獲得が容易であるということは資本の所有者に対して二重の利益を与えるということになる。すなわち「同時に利潤を高めかつ消費財の量を増加する。⁽¹⁰⁾」しかし乍ら、この貿易は資本の所有者にのみ利益を与えるのではなく、労働者に対してもよい影響を与える。リカードオにおいては、かような場合に二通りの理由によって労働者の実質賃金の引上げがなされることで境遇の好転が見られる。

賃金は労働の代償であるとともに労働の価格であって、売買され、かつ数量において増減する総ての他の事物と同様に、その自然価格と市場価格を有するものである。労働の自然価格は労働者をしてその生活を維持し、増減なくその種族を永続させるのに必要な価格である。労働の市場価格は需要供給の関係から労働に対して実際に支払われる価格である。労働の自然価格はどのようにして定まるのであろうか。「第一の場合において、つねに食料、衣類や他の必需品いかんで決まる労働の自然価格は騰貴するであろう。第二の場合において、労働の自然価格は変化しないままであるか下落するであろう。しかし両方の場合において市場賃金率は騰貴するであろう。何故ならば資本の増加に比例してそれは労働に対する需要が増加するであろうし、なせるべき仕事に比例して、それをなすべき人々に対する需要があるだろうから。⁽¹¹⁾」そして、「しかも両方の場合において労働の市場価格はその自然価格以上に騰貴するだろう。そして両方の場合にそれはその自然価格に適合する傾向をもつだろう。しかし最初の場合にこの一致は最も速く達成されるであろう。労働者の状態は改善されるだろうが、おおいに改善されることはないだろう。なぜならば増加した食物と必需品の価格は労働者の増加した賃金の大部分を吸収するだろう。したがって、労働のわずかな供給または人口の僅かの増加はまもなく増加した労働の自然価格をその時の増加した自然価格にまでひき下げるだろうからであ

る。⁽¹²⁾」また、「第二の場合には、労働者の境遇はいちじるしく改善されるであろう。彼は、彼とその家族が消費する諸商品にたいして、すこしも増加価格を支払う必要はない、そして多分減少価格をすら支払いながら、増加した貨幣賃金を受けとるであろう。そして労働の市場価格がその時の低いひき下げられたその自然価格にまでふたたび下がるのは、人口に大きな追加がなされた後のことであろう。⁽¹³⁾」そこで労働者は自分自身とその家族の維持のために一定数量の食物と生活の必需品、便宜品を購入し消費しなければならない。労働賃金が費消される諸財貨のうち最大部分を占めるのは食物であり、食物以外の必要物はほとんど無際限にこれを増加することができるが故に、労働の自然価格が騰落するのは専ら食物によって左右される。言い換えれば、食物価格が騰貴または下落するにつれて労働の賃金は騰貴し、食物価格が下落するにつれて労働の賃金は下落する。実質賃金はこれとは異った変動を示す。

労働者はその労働の代償として貨幣を受取るが、その貨幣でもって食物を購入することだけに充てるのではない。その貨幣のある部分をば労働者自身とその家族の生活に入用な他の財貨を購入するために使用する。食物の価格が騰貴する場合、労働者とその家族が費消する数量の食物が価格騰貴する程度だけ、労働者が受取る貨幣賃金は上昇する。しかし、このような場合に労働者はその生活を支えるのに購入し、消費する他の財貨といえども、土地の原産物がその財貨の構成に入りこむものはその程度に応じて等しい価格が上昇していく。ゆえに、同額の貨幣では以前と同じ数量の財貨を手に入れることはできなくなる。食物の価格が騰貴すれば、労働者の貨幣賃金は上昇するにもかかわらず、労働者の絶対的な境遇は悪化することになる。反対の場合、すなわち、食物の価格が下落すれば労働者の貨幣賃金は低下するも、労働者の境遇はよい方にかわっていく。

このようにして外国から低廉な食物の輸入をすることによって、労働者が手に入れる貨幣は絶対額では減少するも、その貨幣は労働者に多量の生産必需品および便宜品の購入を可能にする。そして、より多数の労働者を同量の資本で雇用することができるとともに、一般利潤率が騰貴することが一層大なる資本を蓄積することになり、いずれにしても労働に対する需要を増大させることになる。このようにして、直接的に間接的に、労働者の実質賃金を引上げる結果になる。いうまでもなく、低廉な食物の輸入をすることは一般消費者の利益に結びつくことになる。

分配の問題はリカアドオ経済学の中心課題であった。すなわち、「土地の生産物—すなわち、労働、機械、および資本の結合充用によって地表から得られるすべての物は、社会の三階級、すなわち、土地の所有者、その耕作に必要な^{ストック}資本つまり^{キャピタル}資本の所有者、および勤労によって土地が耕作される労働者のあいだに、分割される。⁽¹⁴⁾」地代は食物の供給が困難になる結果、騰貴する。したがって、社会の発展によって富が増進することと人口の増加がもたらす必然的な結果として他の事情に変化がない限りは、地代の騰貴とならざるをえないとする。

労働の賃金について考察することにした。リカアドオにとっては、労働の自然価格と

市場価格を区別する。前者は社会の進歩について常に騰貴傾向にあるとする。何故ならば、労働の自然価格を左右する中心となる財貨である食物を生産することを困難に導き、次第にその価格を騰貴せしめる傾向をもっているからであるとする。市場価格は労働の市場価格がいかにその自然価格から外れようとも、他の諸財貨と同じく、最終的には一致しようとする傾向をもつトリカアドオは述べる。したがって、労働の市場価格が自然価格から乖離することは、資本蓄積が速いか遅いかによる。この蓄積の速度は何によって決定されるのかと言えば、それは労働の生産力である。例えば、新しき植民地をみるに、そこでは資本蓄積はきわめて迅速であり、人口増加をはるかに凌駕しているから、労働の市場価格は労働の自然価格に比較してより騰貴する。しかし乍ら、この傾向は永く続くことはできない。「人口が増加しているとき、それらの生活必需品は絶えまなく価格の騰貴となるだろう。何故ならばより多くの労働は必需品を生産することが必要であろう。その上、もしも労働の貨幣賃金が下落するならば、労働賃金が支出されたあらゆる商品が騰貴するのに対して、労働者は二重に影響を受けるであろう。そしてまもなくことごとく生存をはばまれるだろう。その代りに、その結果として労働の貨幣賃金が下落するから、生活必需品は騰貴するだろう。しかし生活必需品はこれからの諸商品の価格の騰貴する前に労働者がなした多くの楽しみと生活必需品と同じように購買するべく十分に労働者に力を与えるべく騰貴しないであろう。⁽¹⁵⁾」そして「地代は、大地の生産物のうち、土壌の本源的で不滅な力の使用にたいして地主に支払われる部分である。しかしながら、それはしばしば資本の利子や利潤と混同されている。そして通俗語では、この用語は、農業者によって彼の地主に年々支払われるものは、なんにでも適用されている。もしも、同じ面積の、そして同じ自然的肥沃度の、二つの隣接農場のうち、一方は、農耕用建物のすべての利便をもち、なおそのうえに、適当に排水され施肥され、また生垣、柵および塀で都合よく区分されているのに、他方はこれらの便益を一つももっていないとすれば、一方の使用にたいしては、当然に、他方の使用にたいするよりも、多くの報酬が支払われるだろう。しかも両方の場合とも、この報酬は地代とよばれるであろう。しかし、改良された農地にたいして年々支払われるべき貨幣の一部分のみが、土壌の本源的で不滅な力にたいして与えられるものであり、他の部分は、地質を改善するためと、生産物を確保しかつ保存するのに必要な建物を建設するために使用された資本の使用にたいして支払われるものであろう、ということは明白である。⁽¹⁶⁾」それは人口増加によって耕作をするのに品質の劣れる農地へと拡張してゆかざるを得なくなり、そのことが資本増加の速度を鈍らす結果になるからである。土地は量的に有限、質的に差等があるために、土地への投下資本を増加する毎に生産率の減退を来すが、人口の増殖力は変化しない故に、旧国で労働の市場価格と自然価格は一致するだろう。従って、開拓後永い年月を経ている国では、他の事情に変化がない限りにおいて、労働の賃金は増加傾向にある。

利潤については労働価値説の立場にたっている。財貨の価値はその財貨の生産に必要な

な労働量によって定まることから、その価値は第1に労働の賃金となり、第2は資本の利潤になる。かような理論は必然的に、賃金の騰貴は利潤の下落となり、賃金の下落は利潤の騰貴となる。社会は発展するにつれて、食物の追加量はますます多量の労働を犠牲にしないで取得され得ないのである。ゆえに、賃金は次第に騰貴する以上、利潤は自然的に下落傾向にあるとする。

したがって、農業技術の改良、新市場が発見されない限りは社会の発展によって富が増進し、人口が増加するにつれて、事物自然の成行として地代と賃金は騰貴していく。しかし、利潤は低落の一途を辿ることになる。この場合、騰貴するのは名目賃金であって、実質賃金は低下していく。社会の発展が一定限度に達すると資本蓄積は終りを告げ、追加労働の需要は全くなく、労働の実質賃金については労働者の最低限度まで押し下げられてしまうだけでなく、人口は飽和点に達することによって社会は停滞状態に陥ってしまうのである。

リカアドオは資本主義社会を唯一にして絶対の社会であるとする。そして、リカアドオは資本主義社会が永続していくことを確信し希望している。しかし、資本主義社会はリカアドオにとって無限に進歩していくものとはいえなかった。もしも資本主義社会を自然の成行に任せておけば進歩状態は静止状態へと向かい、生成発展の状態から沈滞の状態に辿りついてしまうことになる。資本主義社会が沈滞し萎縮しそして老衰する。資本主義社会が沈滞し萎縮していくのを防止して、進歩および繁栄を持続させ促進させるとともに生氣あるものとするにはどうすればよいのであろうか。リカアドオはその解答として農業国との貿易であると言う。農業国との貿易によって工業国はその製品と引換えに、低廉な食物および原料品を入手できる。低廉な食物および原料品を獲得することは資本利潤が高騰していくことになる。資本利潤が高騰していけば貨幣賃金の下落となる。リカアドオはここで実質賃金の上昇を招き、労働者の利益と一致すると述べる。これは消費者の利益にもなるのである。地代は名目的にも実質的にも下落する。ゆえに、この貿易は工業国にとっては、地主以外のすべての階級にとって有利となる。

工業国は農業国との貿易が阻まれた場合どうなるのだろうか。そのとき地代は貨幣地代も穀物地代もともに上昇して、労働の賃金は名目賃金においては上昇するが実質賃金においては低落していく。資本の利潤は名目賃金も実質賃金もともに下落していき、富の蓄積は停止することから沈滞と惰性の社会になってしまう。利得するのは地主のみである。リカアドオをして地主を反社会的存在たらしめるのは以上の理由によるのである。

資本主義社会が進歩発展の過程にあるあかしとして、資本が急速に増加している。したがって、資本蓄積の速度なるものは利潤率で定まるものである。この資本主義社会が発展せんがためには利潤が大でなくてはいけない。利潤が大であることをもって、資本の所有者のみの利益と考えるのではなく、地主以外の社会のすべての者の利益を増進することになる。リカアドオがもつ基本的で根本的な思想と言える。「されば、地主の利害は社会の総ての他の階級の利害とつねに相反することになる。彼の地位は食糧が稀少、

高価である時こそ最も隆盛であるが、之に反して、総ての他の人々は食糧を低廉に獲得することに大なる利益を有している。高き地代と低き利潤とは相互に不分離なものである…⁽¹⁷⁾」すべての貯蓄は利潤から行われるゆえ、一国として貯蓄が急激な進歩状態におかれているときには最も幸福といえるので、利潤と利子はどれだけ高くとも高すぎることはない。資本の所有者と労働者、一般の消費者との間の利害の一致と融合を論証している。リカードは経済理論の立場からして、工業国対農業国の貿易は工業国にとって利益であるとともに工業国の側からどんなに重視されるべきかは、海外から低廉な食物を獲得することが利潤率の上昇を招き、資本増加の最も有力な方法であることを考察すれば理解されるゆえんである。

次にでてくる問題は、商品の数量、商品の豊富という観点からすれば、この貿易はいか様に考察されるべきであろうか。リカードは貿易の問題について価値という観点から究明しなく、専ら商品の数量問題として扱うのである。比較生産費説で展開されている比較的優位をもった産業に特化せんとするのは、すなわち絶対的にみて安価な商品生産への特化である。すなわち、貿易は商品の低廉、数量の増加を齎す。商品の数量が増加することと商品が豊富であるということが、何れの国がその増加した商品をより多く獲得するかということとは別問題である。なるほど、商品の増加は富の増加である。しかし、富の増加が貿易当事国に対して平等に分け与えられる意味にはならない。リカードの見る価値は潤沢によるものではなく、生産の難易によって定められる。富は生活の必需品、便宜品と娯楽品の数量に依存している。それゆえに、人間の貧富はその支配しうる必需品と奢侈品がどれだけ潤沢であるかによって定まる。現実において貿易は価格による売買であり、国境を越えてある商品が輸出されるのは自国におけるより多量の貨幣に対して売り払うことが可能だからである。そしてある商品が他国から輸入されるということは自国における生産に比較して少量の貨幣で購入することが可能だからである。リカードは比較生産費説を論ずるのに数例を用いている。イギリスとポルトガルの両国をあげて、それぞれがラシャとブドウ酒を生産醸造することができるとして展開している。「イギリスは、服地を生産するのに、一年間100人の労働を要し、またもしもブドウ酒を醸造しようと試みるなら同一時間に120人の労働を要するかもしれない。そういった事情のもとにあるとしよう。それゆえに、イギリスはブドウ酒を輸入し、それを服地の輸出によって購買するのがその利益であることを知るであろう。

ポルトガルでブドウ酒を醸造するには、一年間80人の労働を要するにすぎず、また同国で服地を生産するには、同一時間に90人の労働を要するかもしれない。それゆえに、その国にとっては服地と引きかえにブドウ酒を輸出するのが有利であろう。この交換は、ポルトガルによって輸入される商品が、そこではイギリスにおけるよりも少ない労働を用いて生産されうるにもかかわらず、なおおこなわれうるであろう。ポルトガルは服地を90人の労働を用いて製造することができるにもかかわらずそれを生産するのに100人の労働を要する国からそれを輸入するであろう、なぜならば、その国にとっては、その

資本の一部分をブドウの樹の栽培から服地の製造へ転換することによって生産しうるよりも、イギリスからひきかえにより多量の服地を取得するであろうブドウ酒の生産にその資本を使用するほうが、むしろ有利だからである。⁽¹⁸⁾」国際的な取引は価格にもとづいて行われる。ゆえに、貿易をすることから財貨の豊富と低廉をもたらすものである。しかし乍ら、国際分業から生産物の数量が増加するが、その増加物は両当事国に対して平等に分け与えられるものではない。例えば、A国が増加物をより多く取得するとすれば、A国はB国に比較して貿易による差額に該当するだけの利益を余分に先取する結果、差別がここに生じて両国における貧富の懸隔は貿易が継続されている限りは年々大きくなってゆく。

註

- (1) Seymour E. Harris; International and Interregional Economics. p.20 McGRAW-HILL BOOK COMPANY, INC. New York Toronto London KOGAKUSHA COMPANY, LTD. Tokyo
- (2) Richard I. Leighton; Economics of International Trade. P.2 McGraw-Hill Book Company. New York. St.Louis. San Francisco. Düsseldorf. London. Mexico. Panama. Sydney. Toront Kogakusha Ltd. Tokyo
- (3) David Ricardo; The Principles of Political Economy and Taxation, P.77 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第I巻経済学および課税の原理 堀経夫訳 150頁。雄松堂書店
- (4) David Ricardo; Ibid., p.214 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』367頁。雄松堂書店
- (5) Richard I. Leighton; Ibid., p.2 McGraw-Hill Book Company, New York. St. Louis. San Francisco, Düsseldorf. London. Mexico. Panama. Sydney. Toront Kogakusha Company, Ltd.
- (6) David Ricardo; Ibid., pp.82~83 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』堀経夫訳 158頁。雄松堂書店
- (7) David Ricardo; Ibid., p.81 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』156頁。雄松堂書店
- (8) Edwin Cannan; A History of the Theories of Production and Distribution from 1776 to 1848. p.31 Augustums M.Kelley. Publishers New York. 1967
- (9) Ricard; An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock.

Shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus's two last Publications. 大川一司訳『リカードオ農業保護政策批判』27頁。岩波文庫

- (10) Ricardo; *ibid.*, 大川一司訳『同書』28頁。岩波文庫
- (11) Edited by Hisao Otsuka. Yuzo Deguchi. Yoshihiko Uchida; Chapters from the Great Economists—from A.Smith to J.S.Mill— p.108 Gakuseisha
- (12) Edited by Hisao Otsuka. Yuzo Deguchi. Yoshihiko Uchida; *ibid.*, p.108～109 Gakuseisha
- (13) David Ricardo; *ibid.*, p.54 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』堀経夫訳 112頁。雄松堂書店
- (14) David Ricardo; *ibid.*, p.1 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』堀経夫訳 5頁。雄松堂書店
- (15) Edited by Hisao Otsuka. Yuzo Deguchi. Yoshihiko Uchida; *ibid.*, p.113 Gakuseisha
- (16) David Ricardo; *ibid.*, p.33 Everyman's Library Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』堀経夫訳 79～80頁。雄松堂書店
- (17) Ricardo; *ibid.*, 大川一司訳『リカードオ農業保護政策批判』23頁。岩波文庫
- (18) David Ricardo; *ibid.*, p.82 Everyman's Library. Dent: London Dutton: New York デイヴィド・リカードウ全集 P.スラッフア編 M. H. ドップ協力 第1巻『同書』堀経夫訳 157～158頁。雄松堂書店